



われわれ魯迅兵団は
どこへいくのか

——革命的小勇將の大字報

北 京 外 文 出 版 社

われわれ魯迅兵団は

どこへいくのか

——革命的小勇将の大字報

外文出版社

北京

毛主席のことば

状況はたえず変化しており、自分の思想をあたらしい状況に適應させるには、学習しなくてはならない。たとえマルクス主義にわりあいよく通じている人で、プロレタリアートの立場が比較的しっかりしている人でも、やはりさらに学習し、あたらしい事物をうけいれ、あたらしい問題を研究しなければならない。

目次

二つのすぐれた文章を推薦する……………『紅旗』短評（一九六七年第四号）…1

われわれ魯迅兵団はどこへいくのか……………6

上海体育戦線革命造反司令部の魯迅兵団東方紅戦闘隊の大字報

「東方紅」小勇将たちの大字報に拍手をおくる……………上海『体育戦報』評論員…29

毛主席にしたがって一生涯革命をやりぬこう……………魯迅兵団東方紅戦闘隊…34

二つのすぐれた文章を推薦する

「紅旗」短評

上海体育戦線革命造反司令部の魯迅兵団東方紅戦闘隊の大字報「われわれ魯迅兵団はどこへいくのか」と『体育戦報』評論員の「『東方紅』の小勇将たちの大字報に拍手をおくる」は、ともにすばらしい文章であり、プロレタリア文化大革命のなかで毛主席の著作を活学活用したりっぱな手本である。かれらは「的をさだめて矢を放って」おり、毛沢東思想の普遍的真理を自分たちのところのプロレタリア文化大革命の実際に、しっかりと結びつけている。これは、全国各地の革命的な小勇将が学ばなければならず、また、革命的な古参幹部も学ばなければならぬ。

この二つの文章は、プロレタリア文化大革命が資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派から権力を奪取する新しい段階にはいったとき、プロレタリア革命派の内部、革命的な大衆組織の内部にあらわれている問題を提起した。これらの問題は普遍的なものである。かれらは

問題を適時に提起し、その核心を正しく指摘している。これらの問題とは、結局、「私」であり、個人主義であり、ブルジョア世界観である。

「東方紅」の小勇将の大字報はつぎのように指摘している。「プロレタリア文化大革命は人びとの魂にふれる大革命であり、『免職革命』ではけっしてない」 単なる免職は、「今回の偉大なプロレタリア文化大革命を早々に終わらせるだけで、その結果は、組織的には反革命修正主義分子の職を免じて、思想的にはかれらの職を免せず、修正主義の土壌はなお存在し、ひとりの反革命修正主義分子がうち倒されても、つぎのものはいだしてき、また、自分自身がブルジョア反動路線を實行することさえありうるのである」と。なんとりっぱな言葉であり、なんと深刻な言葉であろう！これは、すべての同志が深く考えてみなければならぬことである。

かれらはまた、内部の問題を解決する正しい方法を提起している。それは、たたかいながら、同時に整頓をおこない、しんげんに毛主席の著作を学習し、自覚的に毛沢東思想を武器として、整風をおこない、自分たちの内部に存在するあやまった思想をただすことである。かれらはそれをかくすのではなく、みんなの前で自己批判をおこない、自分たちの思想問題をあき

らかにするとともに、大衆の批判を心から歓迎している。同志のあいだ、各革命的戦闘組織のあいだでは、互いに非難しい、互いに攻撃しあうのではなく、同志的な相互援助をおこなっている。かれらは、真に毛主席のうち出した「団結への願望から出発し、批判または闘争をつうじて、是非をはっきりと区別し、新しい基礎のうえで新たな団結に到達する」という公式にしたがって問題を解決している。これは、プロレタリア革命派の内部におけるマルクス・レーニン主義、毛沢東思想の教育運動である。これこそ、われわれが大いに提唱しなければならぬことである。

われわれは、真の革命的左派であるすべての大衆組織が毛主席の著作を活学活用して、自分でこれらの思想問題を解決し、「私」から解放され、いっそうしっかりしたものに鍛えあげられ、政治的に比較的早く成長するにちがいないと信じている。

革命的な小勇将たちが毛主席の教えにもとづいて、自分たちの組織のなかにある問題と問題を解決する方法を適時に正しく提起したというこの事実は、党中央のプロレタリア文化大革命にかんする十六ヵ条がうち出した、ブルジョア反動路線とは正面から対立する「大衆に自分で自分を教育させ」、「自分で自分を解放させる」ということの正しさを、またもや立証したので

ある。「自分で自分を教育し、自分で自分を解放する」——これは史的唯物論であり、史的弁証法であり、マルクス・レーニン主義の普遍的真理である。人びとの魂にふれるプロレタリア文化大革命のなかでは、大衆に「自分で自分を教育させ、自分で自分を解放させる」ことがいっそう必要である。これは、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線の重要な構成部分である。

権力を奪取する必要がある単位で、プロレタリア革命派は権力を奪取すると、自分の地位に変化がおり、そのために新しい条件のもとで大衆にどう対処するかという問題にいきあたる。大衆に対処する問題では、かならず大衆に自分で自分を教育させ、自分で自分を解放させなければならず、少数のものがなにもかも一手にひきうけて代行してはならないし、まして大衆を押さえつけるようなことをしてはならない。

旧中国は小ブルジョアジーがひじょうに多い国であった。左派の大衆組織の内部に若干の小ブルジョア思想やブルジョア思想があらわれるのは、法則にかなったことであって、おかげさに騒ぎたてるべきではない。問題は、革命的大衆に対処するにあたって、積極的に、うむことなくプロレタリア思想でみちびき、あふれるばかりの熱情をもって、しんぼう強くかれらを援

助して、あやまつた思想をただし、プロレタリアートとしての階級的自覚をたかめ、革命性、科学性、組織・規律性を強化させることである。これが、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線を堅持する指導的幹部のとるべき正しい態度である。もしも、革命的小勇将たちの大方向が正しいことをみないで、かれらの若干の欠点やあやまりをとらえて、それをかってに拡大し、かれらに攻撃をくわえるならば、その結果はプロレタリア文化大革命の対立面に立つことになり、またプロレタリア革命派の対立面に立つことになる。

革命的小勇将の諸君、われわれはかならずプロレタリアートのために気をはき、偉大な社会主義の祖国のために気をはき、いったことはかならず実行し、しんけんにうむことなく毛沢東思想で自分の世界観を改造し、プロレタリア文化大革命をよりりっばにおこなおうではないか。

われわれ魯迅兵団はどこへいくのか

上海体育戦線革命造反司令部の魯迅兵団東方紅戦闘隊の大字報

『人民日報』編集者のことば——本紙はきょう、上海体育戦線革命造反司令部の魯迅兵団東方紅戦闘隊の大字報「われわれ魯迅兵団はどこへいくのか」と、上海『体育戦報』評論員の論文「『東方紅』小勇将の大字報に拍手をおくる」を掲載した。この二つの文章は、プロレタリア革命派が資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派から奪権する闘争の過程で初歩的な勝利をおさめたのちに、普遍的に存在し、しかもさし迫って解決を必要とする、革命事業のこれからの前進にかかわるまわめて重要な問題を提起している。この二つの文章は、毛主席の著作を活学活用したりっぱな手本である。大字報は、たたかいながら整風をおこなうよう呼びかけている。大字報はまた、かれらが提起したプロレタリア革命派内部に現在ある主要な問題を、整風の方法をもちいて、思想面から自覚的に解決するよう主張している。これはひじょうにりっぱなことであり、また時機にかなっている。全国各地のプロレタリア革命派の同志たちは、この二つの文章に十分な注意を払い、自分たちの単位の具体的な状況と結びつけて、し

んげんに学習し、研究しなければならぬ。

歴史の車輪は、はげしい勢いで前進する。

われわれの偉大な指導者毛主席がみずからおこし指導している史上前例のないプロレタリア文化大革命は、いま、いっそう深く、いっそう広く、前進し、発展している。現在、プロレタリア革命派は、毛主席の偉大な教えにしたがって、大連合を実現し、なにもをも圧倒する勢いで資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派にたいして奪権闘争をくりひろげ、かれらの手から権力を奪取し、プロレタリア文化大革命の運命、プロレタリアート独裁の運命、社会主義経済の運命をプロレタリア革命派の手にしっかりと握りしめている。プロレタリア文化大革命はすでにまったく新しい段階にはいっており、革命の情勢はひじょうにすばらしい。そして、ますますすばらしくなっている。

このすばらしい新情勢をまえにして、競技系統の文化大革命をふりかえってみるならば、わずか八カ月のあいだに、プロレタリア革命派は、なんと多くの嵐をくぐりぬけてきたことである。このあいだ、われわれは包圍・攻撃をうけ、悪ば・中傷をあびせられ、威嚇・圧力をく

わえられた。党総支部の指導が必要でないというのは、「党の指導が必要でない」ということであり、「プロレタリアートの司令部を砲撃する」ことであるとか、内外交流の大門をひらくのは、「中央の指示に反する」とか……等々。反革命の気炎はなんと盛んであったことか。まさに「黒雲城を押し、城摧けんと欲す」る勢いであった。だが、われわれは、嵐にむかって笑って立ち、阻止力にむかって突きすすんだ。毛主席の心からの教えは、われわれにつきまことのない力をあたえてくれた。毛主席がわれわれを支持してくれているので、敵がどのように気違いじみた弾圧をくわえてきても、われわれは胸をはって立ち、大声で叫んだ。「『石をもちあげて、自分自身の足をうつ』これは、中国人が一部の愚か者の行為をたとえていった諺である。」資本主義の道をあゆむひとにぎりの実権派こそ、こうした愚か者なのである。「かれらが革命的人民にくわえているさまざまな迫害は、結局、人民のいっそう広範な、いっそうはげしい革命をうながすだけである。」八カ月の戦闘を経て、競技系統の革命派はついに一体となった。二つの路線、二つの運命、二つの前途の大決戦のなかで、魯迅兵団が誕生したのである。魯迅兵団は誕生したその日から、このうえない強大な生命力を示した。偉大な毛沢東思想の指導のもとに、われわれは、魯迅の革命的謀反精神を発揚して、孤立をおそれず、威嚇

をおそれず、包囲攻撃をおそれず、デマ、中傷をおそれず、正面や背後からの攻撃をおそれず、「反革命」のレッテルをはられるのをおそれず、首をはねられるのをおそれず、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派と生死をかけた闘争をすすめ、かれらをふるえあがらせ、一部のまだ考えのつきりしない同志を目ざめさせた。競技系統の二つの路線の大格闘、大決戦のなかで、魯迅兵団はプロレタリア革命路線をまもり、実行する急先鋒となり、競技系統の革命的謀反の骨幹勢力となった。無敵の毛沢東思想のみちびきのもとに、魯迅兵団は、闘争をつうじて発展し壮大になり、急速に成長し、つきつきと巨大な勝利をおさめた。最近、魯迅兵団を代表とする革命派はまた、競技系統の資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派から権力を奪取した。これは、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線のいまひとつの偉大な勝利である。

プロレタリア文化大革命がすでにまったく新しい段階に発展している現在、歴史はふたたびわれわれプロレタリア革命派により高い要求と新しい問題を提起してきた。

毛主席はわれわれにつきのように教えている。「勝利をおさめると、おこり高ぶった気持ち、功労者をもって自任する気持ち、立ちどまって進歩をもとめようとしない気持ち、享楽を

むさぼり二度と苦しい生活をしたがらない気持ちで党内に成長してくる可能性がある。勝利をおさめると、人民はわれわれに感謝し、ブルジョアジーもわれわれにへつらうようになるであろう。敵の武力がわれわれを征服できないこと、この点はすでに証明されている。だが、ブルジョアジーのへつらいは、われわれの隊伍のなかの意志の弱いものを征服するかもしれない。銃をもった敵には征服されたことがなく、こうした敵のまえでは英雄とよばれるに恥じなかったが、糖衣でくるんだ砲弾の攻撃にはたえきれず、糖衣砲弾のまえには敗北を喫する、というような共産黨員がいるかも知れない。われわれはこうした事態を未然にふせがなければならぬ。」われわれ魯迅兵団の内部を点検してみると、最近のひと時期、たしかにいくつかの新しい問題が生じ、いくつかのあやまった思想傾向があらわれている。

軍事一点ばりの観点に反対し、思想革命を先行させよう

軍事一点ばりの観点は、魯迅兵団の一部の同志（一部の指導的同志をふくむ）のあいだに、かなりひどくはびこっている。こうした軍事一点ばりの観点の主なあらわれは、注意力と精力をすべて「×××をつまみだせ」、「×××を打倒せよ」、「×××を罷免せよ」などといっ

たことに集中し、こんどのプロレタリア文化大革命の終局的な目的を、たんに反革命修正主義分子をつまみ出すことであり、つまみ出し、打倒し、免職にすれば、プロレタリア文化大革命は、「徹底的」な勝利をおさめ、中国は変色しないこととあやまって理解していることである。こうした「軍事一点ばりの観点」は、われわれ魯迅兵団の内部に、たんなる「たたかい」のための「たたかい」、打倒のための打倒というあやまった傾向として存在しており、そのため、われわれ魯迅兵団内部の一部の同志は、思想面での革命をおろそかにし、幹部と大衆にたいする政治思想教育をおろそかにし、また、自分の政治学習と思想改造もおこたっている。こうした「軍事一点ばりの観点」は、魯迅兵団内部に反映してきたさまざまな非プロレタリア思想、たとえば、個人主義、自由主義、なわばり主義、でしゃばり主義等々と密接な関係がある。

毛主席は、「赤軍が戦争するのは、たんに戦争のために戦争するのではなくて、大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装し、また大衆をたすけて革命政権を樹立するために戦争をするのである。大衆にたいする宣伝、組織、武装および革命政権樹立などの目標をはなれては、戦争することの意義がうしなわれ、赤軍が存在することの意義もうしなわれる」とわれわれに教えている。「軍事一点ばりの観点」をもっている同志は、実際には、全国にもりあがり全世界

をゆるがしているこんどのプロレタリア文化大革命の偉大な深遠な意義をまだ十分には理解していないのである。プロレタリア文化大革命は、人びとの魂にふれる大革命であって、けっして「免職革命」ではない。わが国のプロレタリア文化大革命は、二〇世紀六十年代のもっとも偉大な革命であり、歴史上、もっとも広範な、もっとも深刻な、もっとも大規模な革命的大衆運動であり、きわめてするどく複雑な階級闘争である。それはまた、人びとの魂を改造し、人びとの思想の革命化をうながす大革命である。この偉大な革命運動の根本的な任務は、修正主義と闘争し、修正主義を防止し、修正主義の根を徹底的に掘りくずし、反革命修正主義の社会的基礎を徹底的に破壊し、その思想的影響を一掃して、毛沢東思想を大いにうち立て、毛沢東思想の根をしっかりとおろさせると同時に、毛沢東思想で武装した確固としたプロレタリア革命事業の後継者を大量に鍛え、つくりあげることである。ところが「軍事一点ばりの観点」、単純な免職、「たたかい」のための「たたかい」というあやまった傾向は、この偉大なプロレタリア文化大革命を早々に終わらせるだけで、その結果は、組織的には反革命修正主義分子の職を免しても、思想的にはかれらの職を免せず、修正主義の土壌はなお存在し、ひとりの反革命修正主義分子がうち倒されても、つぎのものがはい出してき、また、自分自身がブルジョア

反動路線を実行することさえありうるのである。そうなれば、資本主義はふたたび復活する可能性があり、プロレタリアートの祖国は変色する危険がある。毛主席はわれわれに、「わが国ではイデオロギーの面で社会主義と資本主義とのあいだの、どちらが勝ち、どちらが負けるかの闘争は、なおかなり長い期間を経なければ解決されない。……こうした情勢について認識がたりなかったり、ぜんぜん認識していなかったりするなら、ひじょうに大きな誤りを犯すことになり、必要な思想闘争を無視することになるであろう」と教えている。今回のプロレタリア文化大革命のなかで、われわれ魯迅兵団は毛主席の側に立ち、プロレタリア革命路線の側に立っている。しかし、われわれ魯迅兵団のすべての戦士は、競技系統の資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派は、十数年らい、一連の修正主義路線を実行してきており、この修正主義の「安楽な巢」のなかで、われわれの同志は多かれ少なかれ、知らず知らずのうちに修正主義の影響をうけて、さまざまブルジョアジーの思想意識が頭のなかに存在しているということをみなければならぬ。広範な大衆の世界観もわれわれ自身の世界観もなお十分に改造する必要がある。毛主席のプロレタリア革命路線が全面的に完全な勝利にむかっていることに、われわれは毛主席の著作をいっそう学習し、思いきり自分の魂にふれ、「私」をすて

「公」をうち立て、自分の思想を改造しなければならない。一九六七年は、全国で階級闘争が全面的にくりひろげられる年である。われわれは毛主席の教えをいっそうしっかりと心に刻み、片時も階級闘争を忘れず、片時も政治を先行させることを忘れず、客観的世界を改造すると同時に主観的世界を改造しなければならない。そして、階級闘争の大きな嵐のなかで、大衆闘争のなかで、自分をしっかりとしたプロレタリア革命事業の後継者に鍛えあげなければならない。革命的な魯迅兵団は、突かれてもくずれず、押されても倒れない強固な戦闘隊にならないければならず、さらに、毛沢東思想の宣伝隊、毛沢東思想の活学活用の大衆、プロレタリア革命の大熔炉にならないなければならない。

「資料第一主義」に反対し、「人民戦争」をおこなう

毛主席は、「人民、ただ人民のみが世界の歴史を創造する原動力である」とわれわれに教えている。

毛主席はまた、「革命戦争は大衆の戦争であり、戦争をするには大衆を動員する以外になく、戦争するには大衆に依拠する以外にない」といっている。

わが国のプロレタリア文化大革命は史上、もっとも広範な、もっとも深刻な、もっとも大規模な革命的大衆運動であり、わが国の社会主義革命の新しい段階であって、偉大な勝利をかちとるには、毛沢東思想に依拠し、自覚的に立ちあがって「人民戦争」をおこなういく億の大衆にたよる以外にない。そして、このようにしてこそ、すべての修正主義思想、ブルジョア反動路線のさまざまなあらわれをあますところなく、徹底的に暴露することができ、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派を残らずつまみ出すことができ、プロレタリア文化大革命を深くついで徹底的にやりぬくことができるのである。

われわれ魯迅兵団の内部を点検してみると、一部の同志には「資料第一主義」、唯資料論のあやまった傾向が存在している。

林彪同志はつぎのようにいっている。「毛主席をはじめとする中国共産党に指導された労働者、農民、兵士大衆は、これまで一貫して、わが国の革命の主力軍であった。こんにち、かれらは、わが国の社会主義革命と社会主義建設の主力軍であり、また、わが国のプロレタリア文化大革命の主力軍である。」この運動をりっぱにやるうえで、われわれが依拠しているのは毛沢東思想であり、広範な大衆の知恵と力である。しかし、資料第一主義、唯資料論者は、も

っぱら資料だけを強調する。そこで、一部の同志は資料に熱中し、資料集めに精力を集中し、いくらかの資料を手に入れると、まるで「英雄」、「豪傑」、「内情をよく知っている者」になったかのように思っている。そうなると、当然のことながら、大衆は後にくっついて、報告を聞いたたり、スローガンを叫んだり、声援したりするぐらいいしかなんかできなくなってしまふ。また、無意識のうちに、すべて「資料をにぎっている者」にしたがうほかはなくなり、核心小組の指導部も「職はあるが権力がないもの」になってしまふ。広範な大衆は、それでどうして泳ぐなかで泳ぎをおぼえ、たたかうなかでたたかいを学ぶことができるのか。それでどうして運動のなかで自分を鍛え、自覚を高め、積極性を発揮し、才能をのばすことができるのか。

資料第一主義、唯資料論のあやまった考え方とやり方は、毛主席の人民戦争の思想に完全にそむいている。それは『中国共産党のプロレタリア文化大革命にかんする決定』の魂——大衆を信頼し、大衆に依拠し、思いきって大衆を立ちあがらせ、闘争のなかで大衆に自分で自分を教育させ、自分で自分を解放させ、闘争のなかで大衆に鍛練させ、是非を識別させ、才能をのばさせること——を骨ぬきにして、なにもかも一手にひきうけるものである。

魯迅兵団のなかに存在するこうしたあやまった傾向にたいして、同志たちは、十分な警戒心

をもち、いちはやくこれを正さなければならない。

反革命経済主義を徹底的に粉碎し、節約して革命をやろう

毛主席は、「汚職と浪費はきわめて重大な犯罪である」とのべている。

毛主席はまた、「どこでも、十分に人力、物力を大切にすべきであり、けっして目先のことだけを考えて濫用、浪費してはならない」とわれわれに教えている。

反革命経済主義の妖風はわれわれ革命派の内部にも吹き込んできている。そして、一部の同志は階級敵の糖衣砲弾にあてられ、以前の成績の上にあぐらをかき、安楽な生活をたのしむようになりだしている。

この史上に前例のないプロレタリア文化大革命は、修正主義の根を掘りくずすためのものである。われわれ革命派のすべての戦士は、このことを絶対におろそかにしてはならない。真の革命戦士は、どのような条件のもとにあっても、絶対に国家の財産を浪費してはならない。ぜいたくをしたり、派手にふるまったり、ブルジョア的なものを追求したりするのは、プロレタリア文化大革命とまったく相いれないことである。もしこうしたことがひどくなっていくな

ら、かならずブルジョアジーの落とし穴におちこんでしまうだろう。国家の財物をみだりに濫用することは人民にたいする犯罪である。

われわれの一部の同志は、以前とは多少変わってきている。かれらはオートバイ、電話、自転車をはしがり、国家の紙の節約に注意せず、気前のよいところをみせ、少しぐらいの浪費はかまわないと思っている。かれらは、生活や物質の面でも高い水準を求めている。多くの事例によって、魯迅兵団にこのようなあやまった傾向がすでに存在していることを説明することができる。もし、このままひどくなっていくなら、われわれの革命性は弱まり、さらにはまったくなくなってしまう、修正主義的な経済主義の邪道にはまりこんでしまうだろう。

ブルジョアジーの糖衣砲弾にあてられて、生活は腐敗墮落し、政治的に墮落変質していった例は少なくない。こうした教訓を絶対に忘れてはならない。革命的な同志諸君、われわれはかならず毛主席の話を聞き、「節約して革命をやる」ようにしなければならぬ。こうしてこそ、政治的に不敗の地に立つことができ、広範な大衆の支持を得ることができ、また、プロレタリアートの革命精神を永遠に保ち、発揚することができるのである。節約はプロレタリア革命派の本領である。われわれは反革命の包囲攻撃の試練にたえらるとともに、反革命経済主義の

侵蝕の試練にもたえなければならぬ。

排他主義に反対し、大多数と団結しよう

毛主席は、「われわれの敵はだれか。われわれの友はだれか。この問題は革命のいちばん重要な問題である」とわれわれに教えている。

毛主席はまた、真のプロレタリア革命事業の後継者である「かれらは、圧倒的多数の人びとと団結して、いっしょに仕事のできるプロレタリアートの政治家でなければならぬ。自分と意見の同じ人びとと団結しなければならぬだけでなく、自分と意見のちがう人びとともりっぱに団結しなければならず、また、自分に反対したことがあり、しかもすでにあやまちであったことが実践によって明らかになった人びともりっぱに団結しなければならぬ。しかし、フルシチョフのような個人的野心家や陰謀家にはとくに警戒し、このような悪人が党と国家の各級指導部をのっとるのを防がなければならない」とわれわれに教えている。

プロレタリア革命派は、圧迫されていたとき、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線をまもるために、ブルジョア反動路線に猛烈な反撃をくわえ、資本主義の道をあゆむ党内のひと

にぎりの実権派とふるい社会の習慣勢力からの数々の妨害とさまざまな圧力をうけ、白色テロのもとで、困難にみちた闘争をすすめ、一時期光榮ある少数の地位におかれていた。

現在、情勢は急速に発展し、毛沢東思想の輝かしい光に照らされて、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線は勝利をおさめている。プロレタリア革命派は解放され、競技系統の保守組織はくずれさった。だまされていた大多数の大衆も、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派とブルジョア反動路線にしがみついている責任者の正体をしだいにはつきりと見ぬき、ぞくぞく立ちあがって、謀反をおこしている。こういうときに、われわれはかれらにどのような対処すればよいのか。

このことでは、われわれのなかの一部の同志は、自分は以前謀反をおこし、成績をあげたと考えて、ごうまんになり、古参革命家をもってみずから任じ、他の人を軽視している。そして、以前あやまちを犯したがそれを改める決意があり、しかも戦闘に参加したいと思っっている大衆にたいして排他主義をとっている。またある一部の同志は、「闘争のなかで団結を求めらる」のだとホコ先をだまされている大衆にむけて、つぎつぎと砲火をあびせ、あやまった路線を実行した主要な責任者をみのがしている。……こうしたことはひじょうに危険な傾向であ

り、われわれ魯迅兵団の内部では断固としてこれを克服しなければならない。

以前だまされていた同志たちにたいして、われわれはそのなかの大多数の人びとが革命をやるうとしていることをみなければならぬ。われわれは、かれらが以前まちがった立場に立ち、まちがった方向をたどったことをみずから認識するように、また、あやまちを犯した根源をみずから認識するように、かれらに熱情のこもった援助の手をさしのべなければならない。われわれはかれらにたいして、積極的に毛沢東思想を宣伝し、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線を宣伝し、かれらに人びとの魂にふれるこの大革命の偉大な意義を深く理解させ、さらにブルジョア反動路線の本質をはつきりと見きわめさせ、そして、かれらと団結し、ともに戦闘に参加しなければならない。毛主席は、革命において「進歩勢力を発展させ、中間勢力を獲得し、がん迷勢力に反対するという戦術をとらなければならない。これは切りはなすことのできない三つの環である」とわれわれに教えている。われわれは断固として毛主席の教えを実行し、革命的左派の隊列を発展、拡大し、中間派を獲得し、大多数の人と団結し、力を集中して、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派に打撃をくわえ、かれらを孤立させなければならない。大多数の人と団結するのは革命のためであり、革命をやるにはかならず

大多数の人と団結しなければならない。これは毛主席の重要な戦略的思想であり、プロレタリア文化大革命において絶対におろそかにしてはならない重要な問題である。「大多数の人と団結することを知らなければ、革命の勝利をかちとることはできない。このことは、わが党の数十年の革命の実践が証明している。大多数の人と団結することに注意を払わなければ、運動をわき道にそらし、闘争のホコ先を大衆にむけ、方向、路線の誤りをおかすだろう。このことは、半年らしいプロレタリア文化大革命の無数の事実が再三にわたって証明している。」

毛主席に代表されるプロレタリア革命路線は、われわれに、セクト主義、閉鎖主義を防止するよう注意している。毛主席は閉鎖主義の戦術を孤独の戦術、単騎の戦術といっている。プロレタリアートの戦術は、これとは正反対で、「たくさんの人馬をあつめて、敵を包囲し、これを消滅しようとする」ものである。

毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげ、広範な大衆と団結し、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線にしたがって、雄大な文化革命の大軍をつくり、プロレタリア文化大革命の最後の勝利をかちとろうではないか。

思想を整理し、「私」にメスをいれよう

われわれ魯迅兵団内部には一部のあやまった傾向と思想が存在している。これらのあやまった傾向と思想はいったいどのようなようにして発生したのか。その本質はなにか。「これは内部の枝葉の問題だ」という人もある。また、「これはわれわれの工作方法と戦術の問題だ」という人もある。さらに、「これは闘争芸術の問題だ」という人もある。われわれはこれらの観点には賛成できない。毛主席は、「党内における異なった思想の対立と闘争は、つねに発生するものである。それは社会の階級的矛盾および新しい事物とふるい事物との矛盾が、党内に反映したものである」とわれわれに教えている。毛主席はまた、「階級社会では、だれでも一定の階級の地位において生活しており、どんな思想でも階級のらく印のおされていけないものはない」とのべている。魯迅兵団内部に反映したさまざまなあやまった傾向と思想から見ると、それは結局、二つの路線の闘争なのであり、二つの異なった世界観の闘争なのである。われわれは、これらの問題を形而上学的観点、俗物的観点で見ではならず、かならず、弁証法的唯物論の観点で見なければならない。

大衆運動のなかで、とくに史上に前例のない、人びとの魂にふれるこのプロレタリア文化大

革命のなかで、魯迅兵団の内部に二つの路線の闘争、二つの世界観の闘争が存在するのは、なにも不思議なことではない。毛主席は、「ブルジョアジー、小ブルジョアジーの思想意識はかならず反映してくるものである。かならず政治問題や思想問題で、いろいろな方法をもちいてかたくなにかれら自身を表現しようとする。かれらに反映さすまい、表現さすまいとしても、不可能である」とのべている。一九六六年十月、魯迅兵団は圧迫と包囲攻撃をうけていたので、闘争の必要からわれわれはしっかりと団結していた。当時、兵団の内部にあった、二つの思想、二つの世界観の闘争は、主要な矛盾をまえにして、しばらく表面に出てこなかった。現在、隊列が拡大し、闘争が勝利するにつれて、魯迅兵団の内部にひそんでいた排他主義、自由主義、なわばり主義、セクト主義、極端な民主化、でしゃばり主義などが次第に暴露されてきた。魯迅兵団内部に、大衆にたいする二つの思想、二つの世界観の闘争、路線の闘争の問題にたいする二つの思想、二つの世界観の闘争が突出してきた。一部の同志は、毛沢東思想の学習をおろそかにし、魂の奥底での苦しい改造をおろそかにし、「私」との闘争をおろそかにして、過去の「闘争の歴史」、「大きな勝利」のうえにあぐらをかき、これまでのなにもをも

おそれず、すべてを圧倒する気概をだんだんとなくし、プロレタリアートの革命的造反精神をなくしている。一部の同志は、徹底した大衆観点がなく、誠心誠意人民に奉仕し、甘んじて大衆の小学生になるのではなく、「軍事一点ばりの観点」、「資料第一主義」で、政治、思想の革命を軽視し、だんだんと広範な大衆から離れ、嵐のなかを肩をならべてたたかってきた戦友から離れ、ちやほやする話は聞くが、批判は聞きたがらず、いばりちらしている。一部の同志は、苦しい、きめのこまかな活動をやりたがらなくなっている。また、一部の同志は、あいかわらず「少数派」をもって自任し、あやまりを認め、それを改める決意をしており、戦闘に参加しようとして望んでいる同志を排斥している。……これらはすべて、毛沢東思想に反しており、毛主席に代表されるプロレタリア革命路線とは水と油のように相いれないものである。それは結局、ブルジョアジーの「私」がわざわいしているのである。

毛主席は、「われわれが整風をやり、現在もやり、将来もやって、たえず自分の体についているあやまったものを一掃しようとしているのは、ほかでもなく、よりよくこの任務をこなうことができるためであり、党外の、改革を志す気骨をもったすべての人びとと共同して仕事をよりいっそうりっぱにやるためである」とわれわれに教えている。プロレタリア文化大革命で

は、毛沢東思想でふるい世界を批判し、ふるい世界をうちこわすだけでなく、毛沢東思想で武装した、高度にプロレタリア化、戦闘化した、堂々たる文化革命の大軍を創設し、組織しなればならない。もしこのような堂々たる文化革命の大軍がなければ、プロレタリア文化大革命は最後の勝利をかちとることはできない。現在、広範な大衆と団結して資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派の手から権力を奪取し、文化大革命の最後の勝利をかちとるといふ歴史的任務が、光栄にもわれわれプロレタリア革命派の肩にかかっているのである。われわれ魯迅兵団はかならず思想の面からも、組織の面からも整頓をおこなわなければならず、整頓をおこなって、徹底したプロレタリア革命精神をもち、高度にプロレタリア化、戦闘化した革命的左派の隊列をつくりあげなければ、この光栄ある歴史的任務を達成することはできない。

毛主席はわれわれにつきのように教えている。「われわれの党、われわれの隊列は、その大部分が純潔であるとしても、革命運動のよりよい発展とよりはやい完遂を指導するためには、思想の面も組織の面も、しんげんに整えなければならない。そして組織の面を整えるためには、まず思想の面を整える必要があり、プロレタリアートの非プロレタリアートにたいする思想闘争をくりひろげる必要がある。」いま、魯迅兵団は早急に整頓をおこなう必要がある、

また早急に「門をひらいて整風をおこなう」必要がある。つまり、毛主席の著作（おもに「老三編」、「党内のあやまった思想をただすことについて」、「自由主義に反対する」、「中国人民解放軍総司令部が重ねて三大規律八項注意の発布についての訓話」など）の学習をつうじて、各人あるいは各戦闘隊が、思想、観点、問題を出しあい、大衆の意見を聞いて、さらにわれわれのなかに存在する問題を暴露し、今後の闘争の目標と方向を明確にする必要があるのである。整風のなかで、すすんで身を焼き、積極的に批判と自己批判をくりひろげ、虚心に大衆の意見に耳をかたむけることによって、時をうつつさず自分たちの欠陥とあやまちを改めなければならぬ。

われわれは「門をひらいて整風をやる」からには、門はより大きくあけ放ち、すべてを公開して、隠しだてをしてはならず、「身内のボロ」が外にもれるのをおそれてはならない、と考える。毛主席は、「徹底した唯物論者はなにももおそれないものである」、「共産党は批判をおそれない。なぜなら、われわれはマルクス主義者であり、真理はわれわれの側にあり、労働者、農民の基本的大衆はわれわれの側にいるからである」とのべている。魯迅兵団が革命的であるなら、整風をおこなっても失敗しないし、革命的でないなら、整風をおこなって失敗し

ても、それは当り前のことである。これがわれわれの態度である。いま、たたかいを中止して整頓をやり、それからたたかおうというものもあるし、このたたかいを終えてから整頓をやるというものもある。われわれは、たたかいながら整頓をやることを主張する。わが党の一九四二年の整風運動、一九五七年の整風運動の経験が立証しているように、闘争をやりながら、整頓することは、やれるだけでなく、ひじょうにすばらしい効果があげられるのである。これはわれわれ魯迅兵団にも完全に実行できる。このようにすれば、われわれ魯迅兵団はいっそう強固になり、いっそう栄えるであろう。

魯迅兵団はどこへいくのか。魯迅兵団はこれからも無数のはげしい嵐にあり、曲折と反復を経なければならぬだろうが、偉大な教師毛主席の指導と支持のもとに、無敵の毛沢東思想の輝かしい光に照らされて、魯迅兵団の広範な革命派の戦士は、すべての障害を排除し、毛主席の革命路線にそって、勝利のうちに前進する、とわれわれ「東方紅」戦闘隊は確信している。

「私」を打倒せよ！

勝利は革命的な魯迅兵団のものである！

(一九六七年二月二十六日づけ「人民日報」)

「東方紅」小勇将たちの大字報に拍手をおくる

上海「体育戦報」評論員

われわれは、大きな喜びをもって、「東方紅」の小勇将たちの大字報——「われわれ魯迅兵団はどこへいくのか」を推せんする。

これはプロレタリアートの革命精神にみちあふれた大字報であり、闘争の実践のなかで、毛主席の著作を活学活用したすぐれた文章であり、しんげんに学習するに値する。

この大字報がすぐれているのは、これらの若い小勇将たちが、勝利をまえにしてすこしも自己満足するのではなく、自分たちの隊列のなかに存在している問題を深く掘りさげて点検し、自分にたいして革命をおこなっているからである。

「東方紅」は競技系統の魯迅兵団直属の戦闘隊の一つで、成員はみな十六、七歳の青年スポーツマンである。これらの小勇将たちは、ブルジョア反動路線の妖雲がたちこめていたとき、魯迅兵団のその他の戦士たちとともに、毛主席の教えにしたがい、資本主義の道をあゆむ実権

派の打撃や迫害をおそれず、また、保守勢力の包圍攻撃や威嚇をおそれず、「謀反には道理がある」という大旗を高くかかげて謀反に立ちあがった。競技系統では、魯迅兵団が最初に内外交流の大門をひらき、ブルジョア反動路線にたいする反撃の進軍ラッパを吹き、党総支部内の資本主義の道をあゆむひとにぎりの実権派の弔鐘をうちならし、上海体育界の文化革命に功績をうちたてた。最近、かれらはまた、競技系統の資本主義の道をあゆむ党内の実権派から権力を奪取した。輝かしい成績とみのりゆたかな戦果をまえにして、これらの革命的少勇將たちはすこしも満足することなく、「成績は過去を物語るにすぎず、すべてはゼロからはじめるべきだ」というスローガンを適時にうちだし、毛沢東思想を顕微鏡にして、自分たちの隊列のなかに存在しているさまざまな非プロレタリア思想を深く掘り上げて点検、批判し、自分にたいして革命をやりはじめたのである。これはなんと貴い、徹底した革命的精神であろうか。

林彪同志はつぎのようにのべている。「われわれは自分を革命の力とみなすとともに、たえず自分を革命の対象とみなさなければならぬ。革命をやるには、自分にたいする革命をもやらなければならぬ。自分にたいする革命をやらなければ、この革命をりっぱにやりとげることとはできない。」文化革命のなかで、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派にた

いして革命をおこない、かれらから権力を奪取し、闘争によってかれらをうち倒し、かれらを鼻もちならぬものにし、かれらをたたきつぶさなければならぬ。しかし同時にまた、われわれは自分たちの頭のなかのブルジョア思想にたいしても革命をおこなわなければならぬ。「東方紅」の小勇將たちはこのようにやりはじめたのである。われわれの広範なプロレタリア革命派の戦友たちもみなこのようにやらなければならない。いま、われわれのなかにはまだ、この問題にたいして認識が足りず、自己革命にさほど興味をもたず、またそれを強く要求しない同志がいる。なかには、ふるい革命家をもって自任し、しっかりと革命の左派だと思ひこみ、自己革命をやるうとせず、ちよっとした批判も聞くことができないものさえいる。これは毛沢東思想に合致せず、そのまま発展していけばひじょうに危険である。

「東方紅」の小勇將たちのこの大字報がすぐれているのは、かれらが勝利をまえにして、時をうつつさず自己の隊列のなかの問題を点検しているだけでなく、勇敢に「門」をひらき、問題にたいしてするどい、きびしい分析をおこない、それを大字報に書いて発表し、広範な大衆に監督、批判させるようにしているからである。

このこともまたひじょうに貴いことである。偉大な指導者毛主席は、「共産党員は党外の人

ひとの意見に耳をかたむけなければならぬ」とわれわれに教えている。問題があれば、するどい、深刻な自己批判をおこない、しかもそれを勇敢に公開し、広範な大衆に批判、監督させることができるということは、われわれプロレタリア革命派の同志たちが主観的世界を改造するうえで、ひじょうに役だつことである。また、このようにしてこそはじめて、われわれはたえず大衆の信頼をかちとり、永遠に不敗の地に立つことができるのである。

ところが、いま、われわれの一部の同志はこの点についてまだ懸念があり、「身内のボロ」が外部に露見するのをおそれ、「門をひらいて」問題をさらけだすことによって、革命派の威信に影響することをおそれている。こうした考えは間違っており、これは大衆を信頼しないこととのあらわれである。「東方紅」戦闘隊の実践が立証しているように、自分たちの隊列を批判する大字報をはり出してから、かれらは大衆の信頼を失わなかったばかりか、反対に、みんないっそうかれらを信頼するようになり、多くの同志（いままでかれらに一定の見解をもっていた人もふくめて）はみな心の底から小勇將たちにしつかり学ぼうといっており、かれらの威信はいちだんと高まったのである。

要するに、革命的隊列の主観的世界の改造は、ある一定の条件のもとでは決定的な意義をも

っている、とわれわれはみている。現在、プロレタリア革命派の大連合による奪権闘争が初步的な勝利をおさめたこのときに、われわれは「東方紅」の小勇將たちのように、敢然ということをなによりも念頭におき、自分たちの頭のなかや自分たちの隊列のなかの「私」にたいして、すこしも情けようしやなく、猛烈な砲火をあびせ、勇敢に、自分にたいして革命をおこなわなければならない。

勝利はかならず毛沢東思想で武装したプロレタリア革命派のものである。

(一九六七年二月二十六日づけ「人民日報」)

毛主席にしたがって一生涯革命をやりぬこう

魯迅兵団東方紅戦闘隊

一九六七年二月二十五日の夜、緊張した戦闘がつづけられているとき、突然、中央人民放送局から『紅旗』一九六七年第四号の短評「二つのすぐれた文章を推薦する」、『人民日報』編集者のことば、それにわが戦闘隊の大字報——「われわれ魯迅兵団はどこへいくのか」が放送された。われわれはこれを聞いて、血のわきたつのおぼえ、かぎりない興奮と感動でいっぱいになった。「毛主席万歳！ 毛主席万々歳！」われわれは心の底から叫んだ。

毛主席、毛主席！これはあなたがわれわれ上海のプロレタリア革命派にあたえてくれたもつとも大きな支持であり、もつとも大きな関心であり、もつとも大きな励ましです。わが戦闘隊のすべての同志は限りない興奮をおぼえると同時に、たいへんはすかしく思った。これまで毛主席の著作の学習はひじょうに不十分であり、頭のなかにはまだまださまざまな非プロレタリア思想が残っており、活動のなかでは多くの欠点やあやまりがあつて、党のわれわれにたいする

要求とはまだ大きな距離があつたからである。もし、われわれがこれまでのたたかいのなかでいくらかでも成績があつたというなら、また、われわれの大字報がすぐれたものであるというなら、それは、まったく毛主席の教えのたまものであつて、すべて無敵の毛沢東思想の功績である。

わが戦闘隊の十二名の戦士は、みな闘争経験のないわかい青年である。運動が始まってから、われわれは毛主席の教えを聞いて、競技系統の党総支部はこれまで一貫して技術第一、名譽、利益を追い求める修正主義路線を執行してきており、党総支部の主な指導者は資本主義の道をあゆむ実権派であることを知つた。そして、問題はひじょうに重大で、造反する必要がある、絶対に造反しなければならぬと思つた。だが、当時は、阻害する力がひじょうに大きく、また、ブルジョア反動路線の勢力と保守勢力もひじょうに強かつた。それに、われわれ青年の方も闘争の経験がとぼしかつた。どうしたらよいのか？この時、われわれは偉大な指導者毛主席のことを思いおこした。大海を航行するには舵手にたよる。どんなことがあつても毛沢東思想をみちびきとし、毛主席のいうとおりにやり、天もおそれず、地もおそれず、鬼もおそれず、神もおそれずにたたかい、学んでいけばかならず最後の勝利をかちとることができ

る。そこで、わが戦闘隊は成立したその日から毛主席著作の学習を堅持する制度をきめた。半年らしい、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎりの実権派、さまざまな保守勢力とのげいしい闘争のなかで、われわれは、基本的にこのもつとも重要な制度を断固実行してきた。われわれは林彪同志の教えにしたがい、そのときの自分の単位の運動の状況、自分の隊列のなかの問題をみながら、毛主席の著作のなかの關係ある章や節、あるいは語録をえらんで、それと『人民日報』、『紅旗』の社説、その他の補習資料と結びつけ、一節一節、一句一句、一字一字討論した。われわれは学習会を、活動や運動についての話しあい、研究と結びつけ、毛主席の教えと党中央の新聞雑誌の社説にもとづいて、一つ一つの行動計画を議論した。われわれは学習会を民主的生活と結びつけ、二日おき（ときには毎日）に学習しながら批判と自己批判をおこなひ、思想闘争を展開した。学習会はほとんど毎回のようにはげいしい論争になった。同志たちはみな顔を紅潮させて辨論し、ときには涙さえながした。だが、一人ひとりがみな思想をすべてさらけだしたので、最後には毛主席の教えにもとづいて、認識を高め、わりにはやく統一し、闘争のはげいしい嵐のなかを一步一步力強く突きすすんでいくことができた。

われわれが、大字報——「われわれ魯迅兵団はどこへいくのか」を書いたときの状況もやはりそうだった。この大字報のなかで出されているいくつかの問題は、みな「一月革命」の嵐のなかで、毛主席の著作を学習した体得である。

たとえば軍事一点ばりの観点、「資料第一主義」の問題は、一月に魯迅兵団内部に、かなりはつきりとあらわれてきた。そのとき、われわれは学習のなかでこの問題について話し合ったが、隊内には二つのちがった見方があった。ある同志はこう考えていた。兵団の内部にあるために闘争のために闘争し、すべての精力を「×××を打倒せよ」、「×××をつまみ出せ」ということに集中して、毛主席の著作の学習をおろそかにし、思想革命をおろそかにする傾向は大きな誤りである、と。しかし、ある同志はこう考えていた。過去、競技系統に修正主義がでたが、それは資本主義の道をあゆむ実権派がなんんかいたためである。いまはそれを打倒すればよく、そうすれば競技系統の文化大革命も勝利をおさめることができる、と。そこで、みんなのあいだではげいしい論争がくりひろげられた。みんなはさらに毛主席の著作のなかの關係ある文章とらし合わせながら学習した。毛主席は、「赤軍が戦争するのは、たんに戦争のためには戦争するのではなくて、大衆に宣伝し、大衆を組織し、大衆を武装し、また大衆をたすけて革命政権を樹立するために戦争をするのである。大衆にたいする宣伝、組織、武装および革命

政権樹立などの目標をはなれては、戦争することの意義がうしなわれ、赤軍が存在することの意義もうしなわれる」と教えている。また、「わが国ではイデオロギーの面で社会主義と資本主義とのあいだの、どちらが勝ち、どちらが負けるかの闘争は、なおかなり長い期間を経なければ解決されない。……こうした情勢について認識がたりなかったり、ぜんぜん認識していなかったりするなら、ひじょうに大きな誤りを犯すことになり、必要な思想闘争を無視することになるであろう」と教えている。毛主席のこれらの教えは、われわれの心のなかのことをすっかりいってかれていたので、われわれの問題はすらすらと解決した。また、兵団の内部に存在する軍事一点ばりの観点、思想革命の無視によって小団体主義、でしゃばり主義、個人主義、極端な民主化などのあやまった思想があらわれ、さらに活動のなかで、「資料第一主義」であったためにまったく大衆からはなれるという悪い結果ができていたことと結びつけて、戦士たちは、思想革命と政治教育を突出させず、軍事一点ばりの観点で事をはこび、単純に免職をおこない、闘争のために闘争をするという傾向が完全にあやまっていることを深く知った。それは、この偉大なプロレタリア文化大革命を早々に終わらせるだけで、その結果は、当然のことであるが、組織的には反革命修正主義分子の職を免じて、思想的にはその職を免せず、修正主義の土壤はなお存在し、ひとりの反革命修正主義分子が打倒されても、つぎのものがはいだしてき、さらには自分自身がブルジョア反動路線を実行することになる可能性さえあるのである。

一月の末、競技系統で奪権闘争がおこなわれているとき、全兵団のさまざまなあやまった思想はいっそうあきらかになった。このとき、われわれは、毛主席が『矛盾論』のなかでのべている、「党内における異なった思想の対立と闘争は、つねに発生するものである。それは社会の階級的矛盾および新しい事物とふるい事物との矛盾が、党内に反映したものである。もし、党内に矛盾と、矛盾を解決する思想闘争がなくなれば、党の生命もとまってしまふ」という一段をくりかえし学習した。魯迅兵団の状況と結びつけて、われわれは、その多くの問題が二つの階級、二つの路線の闘争のわれわれの隊列のなかでのあらわれであり、しかも問題はかなり重大で、早急に整風をやる必要がある、と考えた。しかし、どのように整風をやるかという問題で、みんなにはまたそれぞれが違った見方があった。ある同志は、いまはたたかいでいいから、整風はこのたたかいが終わってからそれ専門におこなうのがいちばんよい、と考えていた。また他のある同志は、もし整風をおこなうなら、まず門を閉じておこなって問題を解

決し、そのあとで、外部に出してもよい問題を出すべきだと考えていた。しかし多くの同志はこの意見に賛成しなかった。現在、魯迅兵団の問題はすでにあきらかになっていたので、早急に整風をやる必要がある。だが、たたかいてもやめることはできないので、たたかいながら整風をおこなわなければならない。そして、整風の方法は、門をあげておこない、しかも全部あげておこなうべきで、かくしたりしてはならない、と考えていた。この二つの異なった意見をめぐってまた、はげしい論争がおこなわれ、みんなは討議のなかで、さらに毛主席のこれと関係ある著作を学習した。「われわれが整風をおこなわなければならない、現在も整風をおこない、将来も整風をおこなわなければならない、われわれの身についている誤ったものをたえずはらい落とさなければならないのは、われわれがこの任務をよりよくこなうようにするためであり、改革をこころざす党外のすべての人びととよりよく仕事をやりうるようにするためである。」「共産党は批判をおそれない。なぜなら、われわれはマルクス主義者であり、真理はわれわれの側にあり、労働者、農民の基本的大衆はわれわれの側にいるからである。」——毛主席のこれらの教えによって、われわれのすべての戦士の認識はすみやかに統一された。みんなはこう考えた。われわれプロレタリア革命派は、資本主義の道をあゆむ党内のひとにぎり

の実権派に勇敢に謀反をおこすだけでなく、自分自身の頭のなかにある「私」にも勇敢に謀反をおこさなければならない、絶対に「身内のボロ」が外に出ることをおそれたり魂にふれることをおそれたりしてはならず、たたかいつつながら整風をおこなわなければならない。そして、ただちに門をあげて整風をおこない、問題をすべてさらけだしてみんなの批判、監督をうけ、毛沢東思想を武器として、頭のなかにあるブルジョア司令部を粉砕しなければならない。そうであれば、われわれの大連合による奪権は失敗するし、われわれの革命事業はひきつづき前進することができない。

このように、偉大な毛沢東思想にみちびかれて、われわれの戦闘隊は闘争の実践と結びつけて、さまざまな思想闘争を経て、しだいに認識を高め、自己の隊列のなか、兵団のなかに存在する問題をはっきりみきわめ、集団で「われわれ魯迅兵団はどこへいくのか」という大字報を書きあげたのである。われわれの心のなかのもっとも、もっとも赤い太陽毛主席は、われわれにこう教えている。「われわれは、成果があがると、すぐ自己満足するようないことがけっしてあってはならない。ちょうど、清潔をたもつために、ほこりを落とすために、毎日顔を洗い、毎日掃除しなければならぬのとおなじように、自己満足をおさえ、つねに自分の欠点を批判

すべきである。」わが「東方紅」戦闘隊はこれまでのたたかいのなかでいくらか成績をあげたが、それはまったく毛主席の教えの結果である。いま毛主席はまたわれわれに前進の方向をさししめしてくれた。われわれはおごりをいましめ、あせりをいましめ、言ったことはかならず実行し、毛主席のさししめしてくれた方向にそって、勇敢に前進しなければならぬ。毛主席の著作を一生涯読み、毛主席にしたがって一生涯革命をやりぬこう！プロレタリアートのために気をはこう！偉大な社会主義の祖国のために気をはこう！

偉大な、無敵の毛沢東思想万歳！

われわれの偉大な教師、偉大な指導者、偉大な統帥者、偉大な舵手毛主席万歳、万歳、万々歳！

(一九六七年三月十七日つけ『人民日報』)

われわれ魯迅兵団はどこへいくのか
——革命的小勇将の大字報

1967年 初版発行

出版者

発行者

定価 40 円

外文出版社

(北京阜成門外百万荘)

中国国際書店

(北京 P. O. Box 399)

番号：(日)3050-1695

3-J-846P

00023

既刊図書案内

★毛沢東著作★

毛沢東著作選

並製
上製
四四〇円
五八〇円

本書は、日本の広範な読者の毛沢東著作学習の必要にこたえて、毛沢東著作選読編集委員会が中国共産党中央委員会毛沢東選集出版委員会の指導のもとに編集した『毛沢東著作選読（甲種本）』（一九六五年四月第二版）を完訳したもので、中国革命の各時期における毛沢東同志の著作の一部三十九編がおさめられている。

毛主席語録

赤色ビニール表紙
一五〇円

中国社会各階級の分析

三〇円

新民主主義論

六〇円

出版者 北京 外文出版社 発行者 中国国際書店（北京）

延安の文学・芸術座談会における講話

アメリカの記者アンナ・ルイズ・ストロングとの談話

毛沢東同志は論じている——

帝國主義といっさいの反動派はハリコの虎である

「人民に奉仕する」「ベチューンを記念する」「愚公、山を移す」

全世界の人民は団結して、アメリカ侵略者と

そのすべての手先をうち破ろう

——アメリカ黒人、ベトナム南部人民、パナマ人民、日本人、コンゴ
(レ)人民、ドミニカ人民の反米正義の闘争を支持する声明と談話

敵に反対されるのは悪いことではなく、よいことである

書物主義に反対する

農業協同化の問題について

四〇円

三〇円

四〇円

四〇円

三〇円

三〇円

三〇円

四〇円

発行者 中国国際書店 (北京)

出版者 北京 外文出版社

★重要決定、理論論文★

国際共産主義運動の総路線についての論戦

三四〇円

目次内容

国際共産主義運動の総路線についての提案

ソ連共産党指導部とわれわれとの意見の相違の由来と発展
スターリン問題について

ユーゴスラビアは社会主義国か
新植民地主義の弁護人

戦争と平和の問題での二つの路線
根本的に対立している二つの平和共存政策

ソ連共産党指導部は現代最大の分裂主義者である
プロレタリア革命とフルシチョフ修正主義

フルシチョフのエセ共産主義とその世界史的教訓
フルシチョフはなぜ退陣したか

付 録

ソ連共産党中央委員会が中国共産党中央委員会にあてた書簡
ソ連共産党中央委員会がソ連各級党組織と全共産黨員にあてた公開書簡

発行者 中国国際書店 (北京)

出版者 北京 外文出版社

人民戦争の勝利万歳

——中国人民の抗日戦争勝利二十周年を記念して

林彪 四〇円

目次内容

抗日戦争の時期における主要な矛盾と党の路線

統一戦線の路線と政策を正しく実行する

農民に依拠し、農村根拠地を樹立する

新しい型の人民の軍隊を建設する

人民戦争の戦略・戦術を実行する

自力更生の方針を堅持する

毛沢東同志の人民戦争にかんする理論のもつ国際的意義

人民戦争によってアメリカ帝国主義とその手先にうち勝つ

フルシチョフ修正主義者は人民戦争の裏切り者である

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定

三〇円

中国共産党第八期中央委員会第十一回総会の公報

三〇円

★美術作品選集、写真集★

ベトナム人民はかならず勝利する！アメリカ侵略者はかならず敗北する！

——ベトナム人民の抗米闘争を支援する中国美術家の美術作品選集

二〇〇円

ベトナム人民はかならず勝利する！アメリカ侵略者はかならず敗北する！

——第四集—— (写真集)

四〇円

出版者 北京 外文出版社

発行者 中国国際書店 (北京)

出版者 北京 外文出版社

発行者 中国国際書店 (北京)

近刊預告

★毛沢東著作★

毛沢東選集 (第一卷)

哲学論文四編

目次内容

実践論

矛盾論

人民内部の矛盾を正しく処理する問題について

人間の正しい思想はどこからくるのか

文学・芸術について

湖南省農民運動の視察報告

中国の赤色政権はなぜ存在することができるのか

大衆の生活に関心をよせ、工作方法に注意せよ

文学・芸術に関する五つの文献

出版者 北京 外文出版社

発行者 中国国際書店 (北京)

